

エビローグ

「私もまだしっっかり勉強したいから」と彼女は困った顔で言った。私は口べたで、長い間、沈黙が続いた。次第に、私も冷静に自分のいる境遇を認め始めた。私が応接間から立ち上がるまでは、彼女は平然としていたが、私が立ち上がった時、一瞬、目を閉じ、じっと顔を下に向けて目を見た。私は彼女がすすり泣きと見たのを待った。私は前かがみに下を向いて目を閉じている彼女の背をじっと肩を抱き上げたい衝動にかられた。その時だった。

「だめよ、貴方はきつと私を忘れるわ。」と彼女の声がかすかに聞こえた。意味がわからぬまま、私はとっさに、「手紙書くよ」と言った。「だめよ。アメリカに行った貴方は、きつと、いい人ができるわ。私なんかきつと忘れる。手紙を書いて、返事は出さないから。」と言い切った。玄関では、彼女はまともに私を見ようとはしなかった。

大人になりきれない私は、彼女の態度の意味が理解できなかった。あの時、私は、妙に大人としての分別を装い、すんなりあきらめて、立ち上がってしまった。彼女や彼女の家の人が、迷惑だと言って私を追い出そうとしても、じつと、ねばり強く、彼女にせまり、何らかの形で承諾を強要する勇気が私にはなかった。

私は、口べたで自分の書く文章が嫌いで、その後何度も手紙を出そうとしては、ためらった。結局、彼女に一度も手紙が書かなかった。それから、二年半が過ぎた。私は大学を卒業したが、そのまま大学院に進むことになった。再度夏休みの間だけ、1971年の夏、帰国することにした。彼女のことを気になり、安田と会った時、彼女のことを尋ねた。安田は、もう彼女には彼氏が出来ている様だと言った。この前も、四条河原町で、たまたま、二人が仲良く肩を組んで歩いているのを見かけたと話した。

私は、夏の炎天下を、また彼女の家の前まで歩いて行った。しかし、もう、